

△ 今から始めよう

目次

一、今から始めよう……………	1	一、神さまの慈愛と峻厳……………	25
一、「つづける」ことの大切さ……………	3	一、時の秘密……………	27
一、神にゆだねよ……………	5	一、あとがき……………	30
一、押しつけの愛……………	7		
一、狂信と正信(一)……………	9		
一、狂信と正信(二)……………	11		
一、信仰の智慧……………	13		
一、「一途さ」に立つ……………	15		
一、すべて「いただきもの」……………	17		
一、「思い込み」ということ……………	19		
一、再び「思い込み」について……………	21		
一、霊ぬきの生活……………	23		

# みちるベイト

自分のことだけでなく、他人のことにも  
注意をはらいなさい。 — 聖書 —

## 今から始めよう

何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意をはらいなさい。互いにこのことを心がけなさい。

— ピリピの信徒への手紙二章三節 —

自分勝手な人ほど醜いものはありません。すべての争いは自分勝手な言葉や行いから生まれてきます。友達どうしの争い。夫婦の争い。兄弟どうしの争い。親子の争い。近所どうしの争い。同僚や上司との争い。見知らぬ人との争い。これらの争いの原因は、たいてい自分勝手な言動によります。

一方、他人への思いやりの言葉や行いが出来る人は何にもまして美しい人です。仲がよいと言われるすべての人間関係が生まれて来る源は、互いの思いやりにあります。

自分勝手な人は、まわりの人々に不愉快の黒煙

を流し、憎しみと怒りとの種をまき散らしているようなものです。しかし、思いやりの言動は人々の間に安らぎを与え喜びでその場を覆います。

私たちは互いに、他人の自分勝手は見えても、自分自身の勝手は見えないものであります。それはちょうど、相手の顔はみえても、自分の顔は見えないのと同じです。

ですから、つつい、自分のことを棚に上げて相手の事ばかり批判し、攻撃してしまいます。もし、わたしたちが互いに相手の事ばかり批判し攻撃をするばかりであるなら、そのことによつて、ますます互いに憎しみが増し、互いに自分を滅ぼしてしまふことになりましょう。

私たちは決して、相手に向かって、判決でもくだすような判断をせず、思慮深く謙虚でありたいものです。私たちの判断は、大抵のばあい自分勝手な思いによるものです。また、ときとして激情にふりまわされ、勝手な理屈をならびたてて言動してしまいます。そうした、心ない言動や行いがどれほど相手を傷つけ、悲しみと失望とに陥れているかということ、互いに反省しましょう。このような思慮なき言動からは、善きことは何一つ

生まれて来ません。それどころか、ますます救いようのない状況が互いの内に増すばかりです。それは、悲しませ、悪魔を喜ばすだけではありません。

相手に対して我慢することは大切なことです。また、相手を赦すことも大切なことです。しかし、相手を理解することは、もっと大切なことです。相手の言い分をよく聞き、理解しようとすることです。

特別な場合をのぞいて、夫婦に於いて、親子に於いて、友達に於いては、議論で勝ち負けの勝負をしているわけではありません。願いは夫婦がより豊かに結ばれ共に成長していく、というところにあるのですから、そのためには、利己心や虚栄心を振りかざしてはなりません。そのような場で、利己心や虚栄心をふりまわしたとて一体何になるのでしょうか。このことは、親子の関係においても同じであります。

夫婦でも親子でも親友でも、人と人との関わりですから、どうしても意見の違いや思いの違い、立場の違いによって衝突することはあるでしょう。衝突しないで済めばよいし、なるべく衝突しないようにすることもたいせつです。しかし、もっと大切なことは、衝突に対して自分勝手を押し通そうとしないことです。相手の言い分に耳を傾け、相手の言うことを理解しようとすることが大切だ、と先に申しましたが、そうすることは、自分を丸くすることになるのです。

私たちは、言わばとげとげしさや、さまざまな凸凹を自分々に持っている欠点の多い者です。そのような者が、意見や立場や思いが違ふことで衝突することは、実は、互いのとげや凸凹の欠点を、それによって取り除くことができる時でもあるのです。相手の言い分をよく聞くことによって、自分の意見を修正し相手を受入れることによって、自分のとげの一つが落とされ、円熟した知恵と優しさを備えた人間へと一段と成長出来るようになるのです。

自分で気づくよりも、人に言われて気づくことのほうが多いのが私たちです。その意味で、互いに語りあい、互いに聞き受入れ、理解したいものです。

わたしの愛する兄弟たち。よくわきまえていなさい。だれでも、聞くに早く、話すに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。人の怒りは神の義を実現しないからです。

—ヤコブの手紙一章十九節—

みんな平安でいたいと願っています。喜びと感謝をもって生きたいと願っています。愛情ゆたかな人間関係の中で生活したいと願っています。

先ず第一に、自分の夫婦から、親子から、兄弟から、友達から、明日からと言わずに、今から始めてみましょう。

# みるしるバイト

求めつづけなさい。そうすれば、  
与えられる。 — イエス —

## 「つづける」ことの大切さ

求めつづけなさい。そうすれば、与えられる。探さがしつづけなさい。そうすれば、見つかみつかる。門をたたきつづける者には開かれる。

— マタイ福音書七章七節以下 —

× どのような事でも、始めることは簡単ですが、それをつづける事はとても難むづかしいことです。しかし、つづけなければその事を自分のものとする事は出来ません。

× 私たちはこれまで、幾度も、始めては続けることが出来なくて、多くのことを手放てはなし、それらを自分のものとする事が出来ませんでした。

× しかし、つづけた者だけが、それを自分のものとする喜びを得ていることは、よくよく知っています。

× 何事も、つづけることによって、その事の善よさや深さや美しさや豊かさを知ることが出来るようになります。また反面、つづけることによって、その事の問題点も見えてきます。つまり、そのも

のやことの全体がよく見え、つづけた者だけが、それによって自分を一層豊かに成長させるのです。

× つづけると言うことは「求めつづける」ということであります。「ただ、つづければ、よい」と言うことではありません。ただ、つづけているだけでは、何も見えて来ません。機械的な反復はんぷくということでは、ただの繰く返しかえしをしているにすぎず、その者を精神的に殺してしまい、空しさだけがその人を覆おほうことになります。

× 「つづければよい」ということではなく、「求めつづける」ことが大切なのです。そして「求める」とは、求める心が自分の内に強くはたらくことであって、それはとても自覚的なことであります。

× ただ無意味にやたら求めるというのでは「求める」ことになりません。自分が願いをしっかり持って求めることが、求めるといふことです。このような求め方を「求道きゅうどう」というのですが、この場合の「道みち」とはどういうことかと言いますと、「人が主体的に獲得かくとくすべきもの」を「獲得する段階」または、「獲得すべき究極きうごくの境地きょうち」ということでもあります。このような表現は世阿弥せあみと言う方の道について論じた解釈からお借りしたもので、

少し堅苦しい言い方になってしまいました。要するに道とは「そうなるのが正しい筋道であり道理であり境地」のことです。

以上のように「求めつづける」ということを考えてくるとそれは一つの修行者の姿に似て来ます。たしかに、求めつづけるということは修行者の姿なのです。

例えば、「結婚することは簡単であるが、結婚生活をつづけることは難しい」と言われます。しかし、人は結婚生活を続けることによって、人間として成長できるのです。なぜなら、そこには人間として生きるさまざまな苦しみ喜びが、手かせ足かせとしてあるからです。それらを通して人は人間の素晴らしさも醜さも知ることが出来、最後に、人生という筋道に於いて何が最も大切なことなのかと言うこと、又は、人間の在るべき道理に気づくことが出来れば、結婚生活をつづけて来たことの意義があると言えましょう。しかし、すべての結婚した人がそのような生き方をするわけではありません。ただ、同じ日々を繰り返しただけで人生を終える人もあり、また、嫌だからと途中で挫折してしまう人もあります。それらは、特別の場合を除いて、結婚生活をなすつづけることを、「求道」とせず、「修行」としなかつたからでしょう。このようなことは、結婚生活においてだけでなく「つづける」ということがらのすべての場合に言えることです。

「つづけること」「求めつづけること」「求道すること」

が、強い願い心として自分の内に働く思いであるならば、それは「祈り」であります。ですから「つづけること」は「祈りつづつ、つづける」という心がなければ、それは、その人の力みになってしまいます。力みからは破綻か絶望か高慢か、そのいづれかが生じるだけです。それは「求道」にも「修行」にもなりません。

「つづける」ことの最大のこととは、人生を生きつづけるということとです。しかし、その人生をどのように生きつづけるかと言うことは、私たちにとって大問題です。「我らの年の尽きるは一息の如し、我らが年を経る日は七十歳に過ぎず、あるいは健やかにして八十歳にいたらん。されど、その誇るところは勤労と悲しみのみ、……願わくは我らに己が日を数うることを教えて、知恵の心を得しめたまえ。」と詩篇の信仰の人は祈りました。(旧約聖書 詩篇九十篇)

イエスは「求めつづけなさい」と願われました。それは、どの人にも与えられている人生を「求道」と「修行」の場と自覚できる「知恵の心をもつて生きつづけなさい」ということにほかなりません。神を知ることには知恵の初めです。神にその心に向けたなら、その心をいよいよ燃やしつづける求道をしなくては、咲いた花が遂に実を結ぶことなく枯れてしまふのと同じ人生になります。「改心は一瞬のできごとであるが、聖化は全生涯のことである」という言葉を思い出します。

友よ、もう一度、冒頭にある、イエスさまのお言葉に眼を向け、声を大にして幾度も唱えてみましょう。

# みちるべライト

あなたのしようとすることを主にゆだねよ。

— 聖書 —

## 神にゆだねよ

あなたの、しようとすることを、主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。

— 旧約聖書 箴言 十六章三節 —

× 私たちはいろいろな事で思い悩みます。人生は思い悩みの連続だと言っても過言ではないでしょう。

× 思い悩みを心の内にもっていますと、不安が生まれて来て、なにか落ちつかず、イライラし、ときとして攻撃的な言葉や行いが出来て来て周囲に不愉快をまき散らすことになります。

× 思い悩みを持つということの原因はさまざまありましょうが、その一つ一つのことからはともかく、共通している原因は「見通しがつかない」ということにあるようです。

× 仕事の上で悩むとき、それは、仕事の見通しがつかない、という場合が多いようです。また経済的なことがらで思い悩む場合、たいてい、金銭上

の事で見通しがつかない、ということですが、そして人が自分の人生について思い悩むのは、自分の将来について見通しが持てない場合が多いようです。

× いづれにしても、見通しがつかない。見通しがもてない。ということは、私たちの思い悩みの大きな原因となります。

× 誰でも自分の人生に安心を求めています。自分の人生に安心を持つということは、人生の見通しがつくということです。

× 結婚の見通しがつかないままで好きな人とつき合っているなら、そこに不安があります。疑心暗記につつまれ、イライラして何か落ちつきません。しかし、結婚できる見通しははっきりすれば、そのつき合いは希望につつまれた喜びとなり、安心が生まれて来ます。

× 自分について見通しが持てるということは、自分に安心をもつということになります。

× しかし、私たちの人生は、いつも見通しが持てるとは言えません。たとえ、見通しが立っても、その通りに進んで行けるとはかぎりません。思わぬ出来事がおこって、立てた見通しを崩されてし

まうことがあります。そして、あんがい案外そのようなことの方が多  
いのが、私たちの人生のようです。

ですから、賢い人は、自分の思うように運はこばないのが人生  
というものであることを知った上で、ことに当ろうとします。  
その人は、自分の思うように成らないからと言って腹を立て  
たり、悲しんだり、落胆している人を愚おろかな人だ笑うかもし  
れません。

また、別な賢い人は、知恵と努力とで、少しの失敗はあつ  
ても、事を進めて行くべきだとするでしょう。そのような人  
は、見通しが立たないからといって、不安になってイライラ  
したり、悲しんだりしている人は、知恵足らずで努力しない  
人として軽蔑けいべつするかもしれません。

たしかに、私たちは知恵深く且つ努力して、自分に不安を  
呼び起こす原因を突き詰め、それを除去じょきょしつつ、自分の道を  
切り開いて行かなければなりません。目のまえの出来事に振  
り回されて、おろおろしているばかりでは、あまりにも惨あはれめ  
というものです。

でも、人はどれほど知恵深く、かつ努力しても自分の人生  
を完全に見通すことは出来ません。その意味では、人は不安  
や悩みやイライラから全く開放されることはあり得ないでし  
ょう。結局、どのような人も等しく思いおもひを背負って生き  
て行くのです。

にもかかわらず、私たちが根本的に人生の思いおもひから開  
放される道が一つだけあります。それは、自分の命よりもは  
るかに大いなる命に目覚め、その命に思いおもひする自分をそのま  
まそっくりお任せする生き方です。

思いおもひから逃げるものではありません。また、思いおもひに  
勇ましく立ち向かって行くのでもありません。そうではなく  
自分の思いおもひを確たしかな方に、そっくりそのまま預あづけ、その  
方に自分をお任せするのです。そのような自分よりもはるか  
に大きい大いなる命にお会いすることが、「神さまに出会  
う」ということであり、その大いなる命に自分の人生をその  
まま丸ごとお任せすることが、「信仰を持つ」ということな  
のです。

最初に記しました聖書の言葉に目を向けましょう。そして  
声を出して唱なえるように繰り返し読んでみましょう。この言  
葉には確信がみなぎっています。さまざまに思いおもひを体験  
して来た人が、最後にたどり着いた安心の場が示されていま  
す。彼がたどり着いたそこは、「神さまにおゆだねすること」  
だったので。

大いなる命の確たしかな働きに、自分を丸ごとお任せして、「よ  
ろしく願ねがひします」と手を合あわすとき、思いおもひの心が静  
まり、かわって安心の心が芽生めえて来て、未だにも得なく  
ても、「希望」による見通しが確信となり、今を生きる知恵  
と力となって私たちを生かし出すでしょう。



# みちしるべ

各々、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。 — 聖書 —

## 押し付けの愛

押し付けの愛、押し付けの親切ということがあります。しかし、その場合、当の本人はそのことに少しも気づいておらず、自分ではとても善いことをしてあげたと思ひ込んでいます。

そのような人は、本当に相手に親切をしているのではなく、自分が善いことを行うということで、自分に満足している人です。その人は結局相手のためにしているようで、その実、相手の気持や思いに対する配慮が欠けていて、自分の思いだけのことを進めているわけで、それは利己主義的な行いの一つだと言えます。

自分は善いことをしてあげている、という思いに自分が酔わされて、自分の周りが全く見えなくなってしまう結果、周りの人々がどれほど迷惑しているかということに気づかない人がいます。そういう人のことを「ひとり善がりの人」と言いますが、まことに読んで字の如くそれは、自分一人にとって善いことをしているのであって、他の人に対して善いことをしているかどうか、という反省

が全く欠けているわけです。つまり、自分一人にとって善いことをしているにもかかわらず、そのことが他の人にも善いことをしていることになるのだと、自分だけで確信しているのです。こう言う人のことを「独善の人」とも言います。

私たちの生活や人生を悩ます一つに「利己的」な行い、「独善的」な行為ということがありますが、そのような人達の行いに欠けていることは「他人への細やかな配慮」ということです。それは、深い意味での親切心の無さであり、思いやりの無さだといえましょう。それらを一言でいうならば「愛が欠けている」ということになります。

このことを知った上で、愛についての聖書の教えを読むと、その意味がよく理解できるようになります。

たとえ、人々の異言、天使たちの言葉を語るうとも、愛がなければ、わたしたちは騒がしいどら、やかましいシンバルにすぎません。またたとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、そして、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無にひとしい。たとえ、全財産を貧しい人

々のために与えても、自分の身を死に引き渡しても、愛が無ければ、わたしには役立ちません。

× 新約聖書第一コリント十三章一節以下

これは、「愛について」の聖書の教えの一つですが、私たちの安易な「愛」についての考えや思い込みを深く戒めていきます。

自分の全財産を貧しい人のために与え、他人さまのために自分の命を投げ出すことは、即「愛」なのだと思込んでいる。しかし、もしそれが自分の一人善がりの行為であれば、それは本当に「愛」だとは決して言えない、と聖書は戒めるのです。「愛」とはそのような、自分だけの世界のことではなく、他人さまへの深い深い思いやりと配慮のことなのだ。と聖書は教えるのです。ですから、先の言葉に続いてつぎのように語っています。

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず。自分の利益を求めず。激怒せず。恨みを抱かない。不義を喜ばず。真実を喜ぶ。すべてを忍び。すべてを信じ。すべてを望み。すべてを耐える。

× 新約聖書第一コリント十三章四節以下

愛とは、自分にとっての愛なのでなく、他人にとっての愛なのだということを、決して忘れてはならないと思えます。ものごとには自分にとって善であつても、相手にとって善

でない場合があります、そればかりか悪となることだつてあるのです。

ボランティア活動だ、慈善事業だ、社会奉仕だ、援助活動だ、と気負い立ってなされる場合、その熱心さの余り、押しつけの愛、おしつけの思いやりになつてしまいかねないことがあります。

相手が求める本来に必要なことに對する助けでなく、不必要な助けとなつたり、必要以上のお節介になつたり、ときとして全く見当はずれの干渉となつたり、さらに、より困難な問題を持ち込むことになつたりすることになりかねません。

相手の立場を見ないままで、自分の愛の思いを押しつけ、「わたしはこれだけの善いことをしてあげる」とか、「これだけの善いことをしてあげた」と自分で満足している人は、時として、自分だけに安心し、知らない間に傲慢になつてしまつていくことがあります。

愛を本当に愛と成さしめるのは、徹底した謙虚さだと思えます。徹底して相手を思いやる謙虚と、深い知恵、思慮、勇氣、識別、そして、神に對する畏敬の思いが働いていなくてはならないでしょう。

愛は、自分の思いで相手に与えることよりも、相手の思いを自分に深く受け入れることから始まるのではないでしようか。

# みちしるべ

霊の結ぶ実 は 愛であり、喜び、平和、寛容、  
親切、誠実、柔和、節制です。 一聖書一

## 狂信と正信 (一)

「狂う」とは、そのものの正常な働きが失われてしまった状態を指すようです。したがって「狂信」とは、何かを信じ込むことによって、それに溺れてしまい、正常な判断や行動が失われてしまうことだと言えます。

「狂う」ていることの特徴の一つは、狂うている自分自身が全く見えていないということと、それに加えて、自分自身は他の誰よりも最も正しいと信じ込んでいることとあります。したがって、自分の信念に反することは、どのようなことをも受け入れようとしなくなってしまうし、自分の信念に反することは全て、悪魔的な敵と見なし、てしまうようになります。

このような「狂信の人」になってしまいますと、生活のすべてに於いて偏りが現われて来ます。

例えば、読む本がその宗教集団や政治団体が出す教義や主張のものばかりになってしまふとか、そこでのみ通用する発想や言葉を語る集団だけに

固まってしまうとか、さらに、特定の教祖や指導者を神のように崇めてしまふとか、これらのことがますますその人の思い込みを強くさせ、熱狂的、独善的、排他的狂信に追い込んで行き、あたかも自分は大真理に目覚めた者の如くに錯覚し、知らない間に傲慢になり、他の一切を見下げ、攻撃非難するようになってしまいます。そして、他のすべての人々は哀れむべき者、救わなければならぬ者であると固く信じ、自分のなすべき最低の責任もおろそかにして、独善的な使命感に振り回され相手の心の世界に土足で踏み込む暴挙を平気で行う感覚の持ち主となってしまいます。

このような「狂信」の人は、宗教をはじめ様々な分野に於いて昔から今日にいたるまで、後を断つことなく現れて来ます。その結果、家庭が破壊され、家族が対立し、社会的にさまざまな問題をおこすことになるのです。

このようなことを申し上げる時、ある人々は「そうだ、そうだ」と大いに共感なさる方がおありかも知れません。しかし、そのように言っておられる、当のあなたが、極めて世俗的な信念をお持ちの人であって、その世俗の常識とやりに溺れている、紛れもない世俗信仰の「狂信」の人である

やも知れないのです。勿論、斯く言う私自身とて決して全く狂信の人から遠い者だとは言えないでしょう。とにかく、人は誰でも、何らかの意味に於いて「狂信」の世界に関わる危険性を引つ提げている者であることをくれぐれも忘れてはならないと思ひます。

では、「狂信」に対して「正信」とはどのような状態のこ  
となのでしょうか。

「正信」とは、「狂信」に対する「正常信念」又は「正常信仰」と言う意味に理解するなら一応納得出来るでしょう。ここで、使徒パウロの次のような言葉を思い出します。

もし、われらが狂っているならば、神のためであり、正気ならば、あなたがたのためです。

—第二コリント五章十三節—

パウロという人はとても熱心に神を崇め、キリストを愛し、その真実を人々に伝えるために、自分の命を捧げ天に駆けのぼって行った信仰の人であります。しかし、彼は、決して「狂信」の人ではありませんでした。そのことは、先の彼の語った言葉によって知ることが出来ます。

彼は言います。もし私が正常を逸しているように見えるなら、それはこの世の人の知識や経験では知ることが出来ない神を、愛しているからです。神はこの世の人の知恵の範囲を越えた存在でいらっしゃるのです。この世の人々には、その神を語り、その神の命に生きようとするとする私の姿は、きっと狂っ

た者のように見えるでしょう。しかし、私は、決して人様に對しては狂っていません。節度を保ち、理性的で、理に叶った健全な関わり方をしていますと。

「狂信的」とは、信ずる対象にも、自分自身にも、人様にも正常な判断も行動も出来なくなってしまうている状態のことです。

本来、真理を知り、神を信ずるとき、その人は以前に増して、自分自身や他人様が一層によく理解でき、智と識別、勇氣と思慮、神を知り、畏れ、敬うことにより、愛と謙虚とが身について来る者となるのです。ですから、イエスさまは「真理は、あなた方に（なにもものにも惑わされない）自由を得させる」と言われました。（ヨハネ福音書八章三二節）

にも関わらず、「狂信」の人は、神にも人にも正常さを失い、家族から、世間様から、その良識を疑われるような行動を、何の疑問も抱かずに正義や神、真理の名のもとで平然と行なってしまう。正に、慇懃無礼、傲岸不遜、無知蒙昧、加えて酷薄非情な状態がときとして起こります。

これらのことは、過去に於いて、どれほどの残酷非道なことが、神や真理や正義の名に於いて個人が、集団が、国家が犯して来たかを知るとき一目瞭然であります。

（この項次号につづく）



# みちるベライト

霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、  
親切、誠実、柔和、節制です。

— 聖書 —

## 狂信と正信 (二)

「狂」という漢字は「病む」又は「慢る」とも読むようです。よく考えてみますと、なるほどとおもいます。

たしかに狂信の人のものごとに対する感覚は極度な偏りがあるという意味において「病んでいる」と言えます。そればかりでなく、そのような人には「慢り」があるように見受けられます。

健康ということが、肉体的にも精神的にもその部分全体が、バランスよく機能していることであるなら、病むとは、そのバランスが崩れてしまう状態のことだと言えましょう。

例えば、ものごとを見るに、出来る限り全体的な側面から見たり考えたりしないで、ある一面からだけ見て、その全体を見たように思い込んでしまい、それに固守して決して改めようとはしない状態などは、その人が精神的に「病んでいる」

いふしだと言えます。人は、何かに熱狂的になるとき、自分自身も含めて、すべてが見えなくなってしまう。

しかし、その人が社会的に成長し、広く知恵が増すにしたがって、自分がどれほど独りよがりの行動を平気で行っていたかということを知り、恥ずかしくなります。

ものごとには、さまざまな側面があり、いろいろな見方や考え方があって、にもかかわらず、それに気付くことなくすべてを切り捨てて来た自分の愚かさを知ることが、人間としての成長であるというならば、その「成長」とは「謙虚」になることだと言えましょう。その意味で人が熱狂的であるとき、最も「謙虚さ」を失っている状態なのだと言えます。そのような状態のときには、大抵の場合、どのような人の意見も忠告も受け入れようとはしません。そのときたしかに人の精神は「病んでいる」状態だと言えます。

それがどのような立場であれ、自分の立場だけを確かなものだと信じている人には、慢りがあります。狂という漢字は「慢り」とも読むと先に言いましたが「慢り」という漢字は「侮る」という読み方があるようです。このように考えて行きますと、「狂う」ということの内容が漢字の持つ意味からも理解できるようにおもいます。

つまり、人間が何かの主義や主張、または宗教的な教義、さらに世俗的な考えを熱狂的に信奉す

ることによって、自分の精神にバランスを失うとき、必ずその内にある種の慢りが生じて来ます。そして、自分の立場以外の人々を侮るようになりなす。あたかも、自分だけ、または、自分達だけがもつとも正しく、一大真理を悟り知っている者であるかのように思い込んでしまうのです。他のすべての者は正しくない者、真理を理解しない者、憐れむべき者、救ってやらねばならぬ者と化するのです。そのような人達には自分の論理、自分の尺度、自分の価値基準、自分の言葉だけがあつて、それ以外の一切は消えて無くなつてしまふのです。そこがその人達の絶対的な出発点となるのです。

そのような人は、その出発点自体を決して疑うことはしませんが、むしろそれを頭から鵜呑みにする教条主義に徹する信念に生きる人となります。そのとき、もはや誰もその人を変えることが出来なくなります。彼にとつてその信念を捨てることは、自分自身の生の拠り所を失うことであり、自分に死をもたらしことだと思ひ込んでゐるのです。

このように考えてくると、「狂信」とはどうやら自分の信念に生きる独善的な有り様のことだということになります。信念に生きるとは、考えることを捨て、ただ教条にひたすらしがみついて生きる非生産的な生き方以外のなにもありません。

では「正信」に生きるとはどういう生き方なのでしょう。それは、社会的な常識に自分の身を置いて、慢ることなく謙

虚に善良に生きることではなく、積極的且つ自覚的に自分の命を燃えたぎらせて生きることです。それは、自分も今ここに、このように命を燃やしている、自分の本当の根拠を知り、その命のたぎりに一日一日を委ねて生きることです。このような「正信」の生き方をイエスキリストは、次のように示されたのです。

思いなやむな。……空の鳥をよく見なさい。種も時かず刈り入れもせず、倉にも納めない。だが、天の父は養つていてくださる。……あなた方は鳥よりも価値ある者ではないか。……あなた方のうち誰が、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。……今日は生えていて明日は畑に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装つて下さる。ましてあなたがたにはなおさらのことではないか。……思い悩むな。

— マタイ福音書六章二五節以下 —

ここには、どのような力みもありません。教条もありませぬ。形式的な意味での「宗教」も「主義も主張」も、小難しい「イデオロギー」も消えて無くなつてしまつて、ただ有り難き命のたぎりそのものだけが光り輝いています。そこに果敢なき小さな自分を委ねて一心に生きることが「正信」の生き方なのではないでしょうか。





# みちしるべ

神を畏れることは智慧の初めです。

— 聖書 —

## 信仰の智慧

世の中には「宗教」を語り、「信仰」に熱心でありながら、もう一つ深い智慧に欠けているという人がおられます。そのような人を見ると、はたして、自分はどうかのか、と反省させられます。

× ×  
人が宗教や信仰を持つということは、自分の人生についての智慧を開くということであり、具体的な申しますと、日常生活に於けるいろいろな出来事を、「当たり前のこと」と思っていて聞わっていることが、実は「有り難き事」なのだということに気づくことであります。そうなることが「智慧を開く」ということであります。

つまり、信仰によって得る智慧とは、見えなかつたものごとのもう一面の部分、または、そのものの本当の部分が見えるようになる智慧を与えられることです。

この場合、決して誤解してはならないことは、見えなかつた部分が見えるようになるということ、を、なにか、不思議な超能力を与えられるという

ことではありません。今日、巷にあふれる宗教や信仰は、すぐにそのような不思議な力が与えられることと結びつけられてしまいますが、宗教や信仰の神髄はそのようなところにはないと思います。言うならば、「在るものの本当の相が、そのまま見えるようになること」だと言えましょう。ですから、イエスさまは次のように示して下さいました。

あなたがたは、「然り、然り」「否、否」と言いなさい。それ以上のことは、悪い者からであるのである。

— マタイ福音書五章三七節 —

ここでイエスさまがお示しになったことは、ものごとを、そのものが秘め持っている当たり前前の相に於いて素直に見なさい、素直に受け取りなさい、ということでありましょう。

× ×  
ところが、私たちはものごとを、そのものに従って当たり前前に見る智慧に欠け、ときとして歪んで見たり、聞いたり、感じたり、思ったりして受け取ってしまいます。

イエスさまは、人々に「よくよく見なさい」というような語りかけをなさいました。「よくよく見なさい」とは、言わば「悟りなさい」といった

意味であつて、けつして物理的によく見なさいという意味ではありません。

たしかに、ちよつと見には美しく見えても、じつと見てみるとそのものの内に汚れや偽善が見えてくることがあります。親切心の下に、密かな打算があつたり、高慢な誇りのところがあつたり、優しさの行動が、実は憎しみの裏返しであつたり、笑顔の底に不信のところが渦巻いていたりすることがあります。そのような自分や人の相に気づき、人間と言う者の罪深さに気づくことは、深い智慧によらなければなりません。ましてや、その醜い人の現実を悔い、救われることを願う心を自分にもつことを願い、救うて下さる神仏に出会わせていただくためには、深い信仰の智慧が必要なのであります。

また、日常生活に於いて、感覚だけの楽しみ、喜びに振り回されて生きることが、人生の幸いな生き方だと思ひ込んでいるが、自分の魂が本当に求めている幸いは、感覚的な楽しみでは満たされないものであるにもかかわらず、満たしていると思ひ違ひをしている自分の愚かさ、気づかせてくれるのが信仰の智慧でもあります。この世の知恵は人をこの世に縛りつけ、信仰の智慧は自分の魂の願いを聞く耳を人に与えるのです。

信仰の智慧に生きる人は、自分の願望からものごとを見ることの間違ひに気づく人であります。また、どのようなこと

にも振り回されない智慧を頂こうとする者です。なぜなら、彼は、弱い自分を越えた確かな真実なる方、大いなる方としての神さまに対する畏れと敬いの智慧を与えられているからです。

しかし、ときとして、宗教や信仰が、人をより一層に欲深くし、正しくものごとを見る目を奪い、混乱と狂気に導いて世俗の知恵の働きよりも一層愚劣な作用となることがあります。非常識、独善、狂気、憎しみ、戦闘的、不寛容、高慢、偽善などに陥れることがあります。

信仰の智慧は神を畏れ敬うところと、人を愛する心とを与えます。神を畏れ敬うところは、その人に安心と感謝にみちびきます。なぜなら、その人はどのような時にも、神さまの恵みの導きを信じているからです。また、人を愛するところは、その人に満足と幸福とに導きます。なぜなら、私たちの魂は人に思いやりをするときにだけ、満足と幸いとを覚えるからです。

自分の願望だけで自分を動かし、人やものごとを見ていては、いつまでたつても自分は安心出来ないでしょう。自分や人について、そして物事のすべてを有りのまま素直に見るとき、かならずそこに有り難さを知ることができるでしょう。信仰の智慧は、人を当たり前の人にするのです。





# みちるベイト

さいわいなるかな心の清い人  
その人は神を見る — イエス —

## 「一途さ」に立つ

「一途さ」（いちずさ）と言う言葉は、その響きとともに、わたしにはとても心地よく頂きます。それは、純真な心で、ただ一つのことを見つめている姿を連想させるからでしょう。

純真な心で、ただ一つのことを見つめている一途さの姿は「無心」に通じるように思われます。

無心とは、心が無いことではなく、何にもとらわれない透き通った念いが、その人の全存在に充滿している様子のことだと思います。

私たちは毎日、きよるきよると自分の周囲を自分にてらし見ながら生活しています。つまり、何か、落ちつきがなく、心の内ではさまざまなおもいを思い考え、身の外は忙しく動いていて、およそ一途さとか、無心とかいうこととはほど遠い姿です。

忙しいということは決して困ったことではありません

ません。困ったことは、忙しさに自分が振り回されてしまうことです。つまり「忙殺」されてしまうことが困ったことなのです。

忙しさと一途さとは矛盾しません。一途さを混乱させられてしまうことが「忙殺」といいうことなのです。

一途さを失うとき、その人は自分に善きものを得ることは出来なくなります。あれもこれも考え、さまざまなおもいに興味を引かれ、口出し、顔出し、手も足も出している人は、結局、善きものを得ることはありません。

「一途さ」と言うとき、イエスさまのお言葉を思い出します。

さいわいなのは、心の清い人々、  
その人たちは神を見る。

— マタイ福音書五章八節 —

ここでイエスさまが言われる「さいわい」とは、人生のどのような出来事にも影響されない神の深みから沸き上がって来る深い平安のことであって、欲望が満たされることによって世俗から得られる幸いのことではありません。

世俗から得る幸いは、すべてが一時のことです。

思ひ出の彼方(かた)に過ぎ去って、あとには悲しみだけが残ります。

しかし、神の深みから人の内に沸(わ)き上がって来る平安は、  
尽(つ)きることなく、及(およ)びざるところなく、安らぎに漲(みなぎ)った聖(よ)さに満ち、神に在る命の喜び、命のたぎりに同化させてくれる  
のです。

「心の清い」とは、先に申しましたような意味での「無心」  
という状態のことで、敢(あ)えて言えば、一途な心の状態のこと  
です。

したがって、イエスさまがお示しになられたことは、「さ  
いわい」になる条件や、「神を見る」事が出来る条件ではな  
く、「さいわい」とは、どういふことなのか、ということ  
です。

神にあって一途に在るものは、そのまま、神の命のたぎ  
りに生かされるのです。結果としてそうなるのか、希望とし  
てそのようななるだろう、と言うのでなく、そのままそう  
なるということです。そうなることによって「さいわい」のな  
んたるかを知るといふのです。

私たちはたえずうろろ、きょろきょろして、一途さ  
から遠くにいます。まさに、その姿は「風に吹かれて揺れ動  
く海の波に似(に)ています」。聖書は「そういう人は、神から何  
かいただけると思(おも)ってはなりません。心が定(さ)まらず、生き方  
全体に安定を欠く人です」と示しています。

—ヤコブの手紙一章六節以下—

×

×

真(ま)実(み)に向かう歩みは一途さの姿であります。真(ま)実(み)をただ研  
究したり、評論したり、比較したりする人は、「信仰の人」  
と「信仰人ぶった人」との差です。「信仰人ぶった人」は、  
真(ま)実(み)についての自分の感想を語る人、又は自分の感想に生き  
ている人であり、「信仰の人」は、真(ま)実(み)を命(いのち)している人です。  
また、次のようにも言(い)えましょう。「信仰人ぶった人」は真  
実(ま)の周(まわ)りを歩きつづける人であり、「信仰の人」は、真(ま)実(み)の  
真(ま)っ只中に立(た)っている人であると。

なにごとにおいても、そのことの周辺をうろろしている  
人は多く、うろろし続けている内に、そのことの中に入っ  
たような気になつて、それなりの言動をするような人達がい  
ます。しかし、そのことの命には、その人は決して触(ふ)れるこ  
とも知(し)ることも出来(こ)ません。

イエスさまのお声(こゑ)が今も聞こえて来(こ)ます。

招(まね)かれる人は多いが、召(よ)される人は少ない。

—マタイ福音書二二章一四節—

めん鳥(ひな)が雛(ひな)を羽(は)の下に集(あ)めるように、わたしはお前の  
子(こ)らを何(なん)度(ど)集(あ)めようとしたことか。だが、お前(ま)たちは  
応(こた)じようとしなかつた。

—マタイ福音書二三章三七節—

わたしは今、「一途さ」の有(あ)り難(がた)さを深く覚(おぼ)えています。  
と同時に、ただ「一途さ」の道(みち)に立(た)せていただけ(だけ)ることを  
深く願(ねが)います。



# みちしるべライト

神は与えて下さり 神は取って下さいます。

— ヨブ記 —

## すべて「いただきもの」

神さまを信じるとは、自分以上の真なる方のお働きに気づくことであります。

自分以上の真なる方の働きに気づいた人は、「ありがとうございます」という感謝が自然に生まれます。

このような感謝の思いは、喜びと安心とをその人の人生に与え、心を豊かに育みます。

心を豊かに日々を過ごしたいと、どの人も願っています。心の豊かさは、その人の思いの豊かさから生まれて来ます。そして、思いの豊かさは、自分以上の真なる方のお働きが、自分のものにも及んでいる事に気づくことによって、自ずと生じてまいります。

お金や物が沢山あり、名誉や地位があっても心が豊かでない人が大勢いらっしゃいます。そのような人の思いは、とても不安で寂しく、満ち足りた喜びをもって日々を過ごしてはいらっしゃらないようです。

自分の心の不安や寂しさや不満を、自分が持っているお金や物、または名誉や地位、さらに遊びや趣味でもって解消したり、満たそうとしたりすることがありますが、それは一時の誤魔化しであり、後は空しさと疲れが残るだけです。

自分以上の真なる方の働きに気づくことが、神さまを信ずることだと申しましたが、このように神さまを信ずるようになれることは、とても深い智慧を自分が頂くということなのであります。なぜなら、それは自分が生きて来た人生、生きている人生を深く洞察する智慧だからです。

自分の人生の上辺だけを見ている人には、このような深い智慧は頂けません。目先の感覚的な欲を満たすことだけ求めて生きている人には、人生の奥に在る、有り難さが見えません。そのような人にとっては、神さまも仏さまも、所詮は自分の感覚的な欲望を満たしてくれる道具の一つにしかならず、したがって、その欲を満たしてくれてくれる間だけ、その神さまは有り難い神さまなのです。また、欲を満たされることを求めている間だけ、熱心な信者なのです。また、そう信じている間だけ、自分は平安だと思ひ込んでいられるのです。また一方、自分の知識だけを信じている人がいま

す。そのような方には、神も仏も人間の願望が作り出す幻想であつて、人間の知識で理解出来る世界だけが、信じるに足る確かなものだと思ひ込んでいます。そのような人は、自分の人生を自分の責任ですべて負うことが出来ると信じておられるようです。しかし、自分の人生はそれほど単純で、軽薄なものではありません。人生は不思議に満ちているものです。人が己の知識や知恵で簡単に握み取り、理解できるものではないと思ひます。にもかかわらず、そのように自分の人生を見てしまふなら、その人には決して、先のような深い知恵を頂けないでしょう。

×

×

自分以上の真なる方の働きに気づくことによつて頂ける深い知恵は、自分に関わるすべての事柄のなかから「有り難さ」を見出します。有り難さは、ものごとに対し「受け身」に立たして頂くときに、その人の内に生じる新しい心の世界のことでです。つまり、自分の人生に於けるすべての事柄は、これ「いただきもの」なのだと思ひ気づき領解するためにあるのです。たしかに、人生をよくよく省みますと、すべては「頂いたもの」です。自分で創り出したものなど何一つありません。体のすべては、自分が動かす以前に、動くことが出来るように備えられているからこそ、自分で動かすことができるわけです。この事実気づくなら、「いただきもの」としての自分の身体の有り難さに気づくのです。人との出会いの不思議さ、今の時代に、自分として生きている不思議さ、さまざま

な関わりを通して自分の物として、身のまわりに在る「物」の不思議さ、どれもこれも「有り難き頂もの」ばかりであることに、改めて気づくのです。

×

×

不幸のどん底に落ちて無一物になつてしまつたヨブという人は、苦しみと悲しみとの中であつて叫びました。

わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。

神は与え、神は取りたもう。

神の御名はほめたたえられよ。

—旧約聖書ヨブ記一章—

ヨブは自分の表面感覚の欲から語っているではありません。また、自分の知識や知恵から言葉しているのでもありません。そのようなところからは、このような思ひも言葉も出て来ませんし、文句や嘆きや批判や攻撃や凶暴さや混乱、争いだけが出てくることでしょう。

ヨブは悲しみにも関わらず、苦しみを覚えつつ、不安でありながら、なお、それらをすべて包んで下さっている、自分以上の真なる方のお働きの「有り難さ」を、信仰の知恵で気づき知っていたのです。その信仰の知恵に立つとき、生も死も有り難き「いただきもの」だったので。

すべて感謝して受けるなら、捨てるべきものは何もありません、という使徒パウロの体験的言葉が示す信仰の世界に、静かに思いを向けましょう。



# みちしるべ

人の悪はその人の心の内から  
出て来る。

—聖書—

## 「思い込み」ということ

神さまを信じる、ということとは、神さまがいらっしゃる、ということをして「思い込む」ことではありません。つまり、「信仰」とは「思い込み」ではありません。

しかし、私たちはときとして、信仰を思い込みだと思ったり、事実、思い込みの信仰をしている人がいらっしやいます。

× まともな信仰は、私たちを「思い込み」から解放<sup>はな</sup>してくれくれます。つまり、人を「思い込み」から開放し、まっただき自由にしてくれる働きをするのが「信仰」であり「宗教」であり、神さまを信ずるといふことです。

× しかし、世間を眺めていますと、宗教をもち、その教えを信仰したことによって、ますます思い込みの心が強くなり、自由どころか、以前の生活よりも不自由になって、社会的に偏<sup>かた</sup>った生き方や考え方をなさるようになった、という人がいます。

× 「思い込む」とは「堅く信じて疑わなくなるこ

と」だとしますと、それはとても恐ろしいことです。

堅く信じて疑わなくなる、ことは一見、とても立派なことのように思うのですが、よくよく見つけてみますと、「堅く信ずる」のは「自分の思い」であり、「疑わなくなる」のも「自分の思い」なのであります。

× 「自分の思い」というのは、とても曲者<sup>くまもの</sup>のようです。「自分の思い」に対して、用心<sup>おこた</sup>を怠ると、すぐに「自分勝手な思い」になってしまいます。ですから、自分勝手な思いで、何かに対して「思い込む」と、それは、とても恐ろしいことが起こるのです。

× 思い込みの恐ろしさは、「思い違い<sup>ちが</sup>い」をしてしまふところにあります。つまり、事実とは違ったことを事実だと思いついてしまふことは、思い込んだその人や、思い込まれた者にとっても、それはとても困ったことであり、恐ろしいことでもあります。

× 思い込みの恐ろしさは、私たちの身近なところでいつも起こっています。例えば、人と人との関係において起こります。その場合、自分が被害者になることもあります。自分が加害者になって

いることもありませう。

「あの人は、勝手に、わたしが〇〇と言ったのだと思ひ込んで、わたしのことを恨んで、友達にわたしの悪口を告げ回っているのよ」

などと言う困った出来事は、何処においても聞くことですが、それが、たわいもないことなら、捨てておいてもよいのですが、噂が噂を生み、それが大きくなったり、その人の人格に深く関わり、社会的な影響を及ぼし、ひどい場合はその人の生死にかかわるようになってまいりますと、ただ「困ったことだ」ではすまされなくなってしまう事です。事実「思ひ込み」から殺人事件に発展してしまう事だであるのですから。

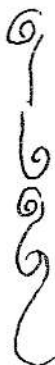
思ひ込みは「思い過ぎ」によっておこることもありませう。必要のないことまで考え思ひ、心配したり、悲しんだりしてしまふのも困ったことですが、人との関係で、思い過ぎをされると、単に勘違いだったで済まされぬことになりかねませう。

思ひ込み、ということが持っている問題性は、「自分の思ひ込みにあるようです。つまり「自分」というものが、決して確かなものではない、というところにあります。「思ひ込み」も「思ひ違い」も「思い過ぎ」もすべて「自分の思ひ」のところから起こってくるのですから、問題は「自分の思ひ」であり「自分」なのです。

考えてみますと、「思ひ込み」とは、何かに対して、自分が勝手に思ひ浮かべる幻想であり、その幻想を事実だ、本当なのだ、と信じて疑わなくなり、自分が造りだした幻想に、自分が振り回されている状態だといえます。それは正に一人相撲であり、独り芝居であり、まことに滑稽極まりなし、ということになりませう。でも、それが、その人だけの世界のことなれば、自業自得です。しかし、それが周囲に影響を及ぼすことになりませう、とても困ったことになりませう。

人は誰でも、「自分の思ひ込み」に捕らわれて生きている者です。そして、この「自分の思ひ」こそ、人間にとって曲者なのです。その思ひはとても利己的です。自分中心です。とても勝手者です。神や仏でさえ自分に都合のよいように利用しようとしませう。人の世の苦しみ悲しみ、憎み争う原因はすべて「自分の思ひ」から生じて来るようです。

聖書はこの「自分の思ひ」を問題にし、正しい「自分の思ひ」に生きる人へと生かそうとする教えを説いているのです。どの人も、「自分の思ひ」から開放されるとき、安心を得ませう。本当の平和は、自分の思ひから、自分が開放されるとき、人々の間におとずれるでませう。聖書の教えの健全さがここにありませう。





# みちるベイト

人の中から出て来るものが人を汚す

— 聖書 —

## 再び「思い込み」について

前回にひきつづき、「思い込み」について、もう少し考えてみましょう。

思い込みとは、事実を見ないで、自分の思いでものを見てしまうことです。それは、白い色を、赤色の眼鏡メガネで見て、赤い色だと思ってしまうのと同じです。

このような「思い込み」を、私たちは日頃、気づかないで、たくさん行っています。その意味で「思い込み」の恐ろしさは、ただ、間違っている物事を見てしまった、と言うことにあるのではなく、自分の思いで見ているのに、事実を見ているのだとする、自分の間違いに気づいていない、ということにあります。

×

×

私たちは誰でも、自分の思いを持っていますが、その思いとは、何かについての思い、であって、それは、自分の頭の中で決定する働きのことです。そのような働きのことを「観念かんねん」と言います。その意味では、私たちは何時も自分の観念でものごとと関わり、且つ行動している者です。とすると、

私たちは、はたして、そのものの本当の姿を見て生活しているのでしょうか。ひよっとすると、すべて、自分の頭の中で勝手に造りあげた観念で見たり、聞いたり、理解したりしたものを、本当のそれだと思ひ込んで生活しているのではないのでしょうか。

もし、私たちの物事に係わる関わり方が、そのような自分の観念、つまり「思い込み」によるものだとすれば、私たちの日常生活は、すべて、自分勝手に造りだした「幻想まぼろし」に関わっているにしか過ぎないこととなります。

このようなことは、私たちの生活のなかのさまざまなおとこで起こっています。例えば、恋する男女が、恋がさめれば、互いにただの女、ただの男—ときには、最もつまらない女や男—となり、すべては、思い込みの幻想まぼろしでしかなかったことに気づくのもそのひとつです。また、最も理想とする人物だと見え、信奉しんぽうした者が、こちらの思い込みで造った偶像くわうぞうにしか過ぎなかったということもそのひとつです。また、汚れや悪魔も、そのほとんどが、ある人が自分の観念で造り上げ、生み出した幻想まぼろしであるというのも、そのひとつです。

いずれにしても、私たちは自分の思い込みという観念で、さまざまものを描き、造りだし、生み出し、それらが、あたかも事実であるかのように

に決定し、事実を歪めて見てしまうという、誤りをおかしているばかりか、そのような自分に、全く気づいていないのです。

ところで、私たちは、自分の外の世界だけを自分の観念で見ているではありません。私たちは、自分自身をも、自分の観念、つまり自分の思い込みで見ているのです。私たちは、自分の本当の姿を見ないで、自分の思いで判断している。自分自身を見ているのです。それは、自分の容姿を鏡にうつして見るとき、自分の本当の姿を見ないで、自分の思い込みで見自分の姿を見て、満足したり、不満に思ったりしているのと同じです。また、実際の自分の姿に気づかないで、自分があたかも立派な者であるかのように、思い込んでいる「思い上がり」や「自惚れ」もそのひとつです。

自分の観念は、次のような場合にもはたります。それは「望ましい自分の像」を作って、そのような自分に成ろうと努力する場合です。また、「望ましい社会」を作って、それを実現しようとする場合です。さらに、「望ましい宗教」を造り、「望ましい神」をつくって、それに帰依し信仰に生きようとする場合です。このような場合に共通していることは、自分が望ましいと考えた観念に自分が縛られてしまうことです。たとえば、「望ましい自分の像」を作って、そのような自分に成ろうとするとき、絶えず不安と傲慢とがその者を縛って、素直な自分を打ち消し、ときとして偽善者となり、と

ても不自由な生き方を余儀なくされます。このようなことは「望ましい宗教」「望ましい神」を立てた場合にも同じことがおこります。

このように考えて来ますと、「思い込み」とは、自分の観念が造り出した事であり、問題は「自分の観念」だということになります。

イエスさまは、この点を鋭く指摘され、次のように言われました。

皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出てくるものが、人を汚すのである。

—マルコによる福音書七章十四節以下—

とても分かりやすい言葉です。もともと「汚れたもの」や「聖いもの」があるわけではありません。物事に「汚れ」をつくり「聖さ」をつくるのは、人が自分の中から生み出す思いつまり観念によるといわれるのです。

このイエスさまの言葉はとても深く、私たちの思いの在り方の、根っこのところを突いていらっしやいます。そして、ここで指摘していらっしやる事こそ、イエスさまがその生涯をかけて、私たちに提示し、「思い込み」の落とし穴から私たちを救い出そうとなされたのであります。

先に、信仰とは思い込みではなく、かえって、私たちを、思い込みから解放してくれるものが、正しい信仰であると言いましたが、次号ではこのことについて考えてみましょう。





# みちしるべ

肉の思いは死であり、霊の思いは命と平安とである。

— 聖書 —

## 霊めきの生活

皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。外から人の体に入るもので人を汚すことができず、何もなく、人の中から出てくるものが、人を汚すのである。

— マルコによる福音書七章十四以下 —  
私たちは、「自分は正しくものごとを見ています」と思っていますが、正しくものごとを見ることは、とても難しいことではありません。

正しく見るといふことは、そのものに即して見ることですが、私たちはいつも、そのものに即して見ないで、自分の思いに即して見えています。

自分の思いに即して見ようとは、言わば自分勝手にものを見てしまう、と言うことです。

自分勝手にものを見てしまう、と言うことは自分の思いで、そのものを縛ってしまうことです。このようなことが、人と人との間で生じますと、とても困ったこととなります。

あるとき、兄弟の間で遺産分配のことで、不満を持った人が、イエスさまに助けを求めてきました。

た。そのとき、イエスさまはその人に次のように言われました。

「だがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人にしたのか」 (ルカ十二、十三)

イエスさまが不愉快に思い、注意をうながされたのは、調停人になるということではなく、人が自分勝手な都合で、イエスさまを調停人に仕立てあげてしまったことです。ですから、先の言葉につづいて、イエスさまは「貪欲にも注意をほらい、用心しなさい」とおっしゃいました。「貪欲」とは、「より多く自分のために持つ」ということです。別な言い方をすれば「貪欲」とは「我の思い」のことだとも言えます。と言うことは、相手も自分も、自分勝手な「我の思い」で縛り、仕立てあげてしまう私たちの精神の在り様に、目をしっかりと向けることを促されたのです。「精神」と言うとき、難しく聞こえますが、簡単に言えば、自分の在り方全体を選びとる働きのことであります。その精神の在り様が「貪欲」なのが、私たちです。

それにしても、もともと私たちの「精神」なるものは、とても貪欲なのです。これは、「貪欲」が「精神」だと言っているのではありません。むしろ「貪欲であろうと自覚している」のが「精神」なのであって、だからこそ、「精神的」な存在で

ある人間は理想を抱いたり、不幸を感じたりするのです。勿論さまざま文化文明を生み出し築くのも精神であり、醜い争いをするのも人間が精神的な存在だからです。このような「精神」のことを、わたしは「魂」と言っています。

それにしても、私たちは「精神（魂）だけ」の者ではなく「肉体を持つ者」であり、「霊を持つ者」でもありません。ところが、わたしたちは「肉体と精神（魂）」だけを働かせて生活しているようです。つまり「霊ぬきの生活」をしています。そのような「霊ぬきの生活」をしていきますと、私たちの内に何が生じて来るのかと言いますと、不安です。それは深い平安や満足を感じることが出来ない不安です。具体的に申しますと、物に満たされ、お金に満たされ、名誉や地位を持つても、平安であり得ないのは、「霊ぬきの生活」をしているからです。

「霊」と言いますと奇異に感じられる方がおいでになります。が、「霊」とは「こころ」とよばれているものなのです。ですから、先に言いました「深い平安がない」とは、「こころに本当の安心がない」と言うことであり、それはまた、自分の霊に満足感がない、ということになりましょう。

「霊」は言葉を超えた働きです。また、霊は魂（精神）のような理屈の世界でもありません。霊は素直です。神さまのこころに通じています。ですから、霊は美であり、愛であり、善であり、真実であり、調和であり、平安であり、希望であ

り、永遠なのであります。そのような霊の働きの世界を「キリスト」と言うのです。まさに、イエスさまはその「キリスト」を完全に生きられたのです。ですから、「イエス・キリスト」とは、「イエス」は「キリストを生きられた」ということを意味している呼び名なのです。

それ故に、キリストを完全に生きられたイエスさまの生きざまに接するとき、どの人も、貪欲に振り回されて、霊ぬきの生活をしている醜い自分の姿に、ふと気づかされるのです。それは、私たちの内なる霊の覚醒を促される出来事なのだと言えます。

人は本来、素晴らしい者です。しかし、霊ぬきの生き方をしている人は素晴らしい自分を完成できません。どれほど肉体や精神（魂）に配慮したとしても、霊ぬきの生き方をしていない、本当の平安を得ることは出来ないでしょう。

自分の霊への配慮を真剣に考えましょう。教会で行う礼拝に参加し、そこで祈り、聖書の教えを聞き、神さまを賛美することは、自分の霊への配慮のひとつです。

使徒パウロは次のように言いました。

肉の思いは死であり、霊の思いは命と平安とである。

——ローマの信徒への手紙 八章八節——



# みちしるべ

まちがってはいけない。  
神は侮られるようなかたではない。 —パウロ—

## 神さまの慈愛と峻厳

まちがってはいけない。神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈りとることになる。すなわち自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り、霊にまく者は、霊から永遠の命を刈り取るであろう。わたしたちは、善を行うことに、うみ疲れてはならない。

—ガラテヤ人への手紙六章七節—

すべてを見、すべてを知り、すべてを聞き、すべてを感じているものが、見えない世界に働いていらっしやいます。それを人がどのように称するかは、さほど重要なことではなく、大切なことは、そのような働きが事実在る、ということに私たちが畏敬の念を向けることであります。

神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛に止まっているなら、あなたに向けられる。そうでないとあなたも切り取られるであろう。

—ローマ人への手紙十一章二二節—  
見えない神の働きは慈愛に満ちていると同時に峻厳である。パウロは言います。「峻厳」とは一切の妥協も誤魔化しもなくスパーツと切りとってしまうことであります。

ですから、「まちがってはいけない。神は侮られるようなかたではない」とパウロは言うのです。「侮る」とは「相手を軽く見てバカにすること」であります。

つきつめたところでは、あれか、これか、であって、決して中途半端はありません。神の慈愛は徹底して慈愛であり、神の峻厳さは徹底して峻厳なのであります。徹底した慈愛と徹底した峻厳とは矛盾しません。

しかし、私たちは慈愛と峻厳とを正しく分けることをしないで、言うなれば「ごったまぜ」にしてしまい、神の道理、天地の道理から逸脱してしまふ愚かさを、こともあろうに「ゆるし」や「寛容」や「愛」等という、自我の低俗な倫理的観念、また真に神への畏れをもたない甘ったれた観念的理想主義的宗教心でもって犯してしまいます。そういう者達は、しきりに「寛容」を説き、「祈ってあげましょう」などと軽々に叫びます。

神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるのか。あなたのかたくなな、悔い改めない心のゆえに、あなたは、神の正しいさばきの現れる怒りの日のために神の怒りを、自分の身に積んでいるのである。神はおののに、そのわざにしたがって報いられる。

—ローマ人への手紙二章四節以下—

神の審判は峻厳な行為であります。その神の峻厳さの前に、人が自我によって構築した「宗教的哀れみや寛容」など振り回すことは、真に神への畏敬を持たぬ者の傲慢以外のなにもでもありません。

神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者に向けられ、神の慈愛は、あなたがたがその慈愛に止まっているなら、あなたに向けられる。

パウロは畏れつつ告白します。これは何と慰めに満ちた言葉でしょうか。神は徹底的に慈愛に満ち、徹底的に峻厳であられるからです。

自分がまいたものは、かならず自分で刈り取るのです。そこで、人は自分の姿をハッキリと見させていただくと同時に、神の慈愛と峻厳を身をもっていただくのです。この道理は神の道理、天の道理なのです。この道理は神の秘儀であります。神の秘儀に、人は指一本たりとも触れることはできません。「さばいてはならない」とは、神の慈愛と峻厳にたいして

ただただ、畏敬の態度をもって「黙せ」ということでありましょう。一言半句たりとも肯定も否定もしてはならない、ということでありましょう。ここに、「神にお委ねする」ということの重たさがあるのです。

「自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り、霊にまく者は、霊から永遠の命を刈り取る」と、パウロは神の秘儀を具体的に示します。パウロが「肉」と「霊」とを対峙させて語るときの「肉」の意味するところは、神によって生かされている自分自身の事実を、まったく知らないままで、生きている生活のすべての「形」を「肉」と言ったのであります。

つまり、生かされていることに感謝なく、生かしていただく神に畏敬の念をもつことなく自分を生きている生き方で「肉に従って生きる」と言ったのです。さらに、自分の思いで「神」を理解し、「信仰」を方向づけする傲慢さも「肉に在る生き方」なのであります。これらを一言でいうなら「自我による生き方」と言うことになります。それに対して「霊」とは、自分の生きている根底に、神の慈愛と峻厳とを確かに見て、知って、信じて、委ねている故に、そこから生じて来る平安に生きる、生き方のことであります。

今、わたしは、自我に於いてではなく、霊において神を畏敬する生き方を、生きてる自分であるのか、と神から問いかけられていることを強く覚えます。これは、なんと有り難いことでありましようか。

# みちしるべ

神のなされることは  
皆その時にかなって美しい。 — 聖書 —

## 時の秘密

神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終わりまで見きわめることはできない。

— 旧約聖書 伝道の書三章十一節 —

すべての出来事には「その時」があります。それは、成るべくして成る時であり、起こるべくして起こる時、のことです。ですから、その時が来るなら、人がどのような知恵や力を労しても、止めることは出来ません。

その時が来て宇宙は生じ、その時が来て地球が生まれたのでしよう。そして、その時が来て地球は無くなり、その時が満ちるなら、宇宙は消え去ります。あなたも、わたしも、その時が来て、この世に生まれて来た者です。そして、その時が来れば、あなたも、わたしもこの世から去らねばな

りません。  
しかし、誰も、その時、を見きわめることはできません。誰にとっても、その時は、永遠の秘密なのです。

でも、私たちは、この永遠の秘密としての、その時に思いを向けようとはしません。それどころか、自分が、その時を自由に造り出すことが出来ると思ひ、「あれをしよう。これもしよう。あのようになろう。」と考え努力して生きています。

「あれをしよう。これもしよう。……」  
と思うことを止めるべきだ、と言っているのではありません。思い、願ひ、計画を立て、その実現のために努力することは、知恵を持つ人間としての当然の務めであり、ます。しかし、人が計画し造り出そうとする「時」に勝って大いなる「その時」が、私たちの人生の根っこに働いているのです。

人の心には多くの計画がある。しかし、ただ主（神）のみ旨だけが堅く立つ。

— 旧約聖書 箴言十九章二一節 —

私たちが、自分の人生を注意深く眺めて見るとき、自分で造り出そうとする「時」を越えて、自分に深く関わって来る不思議な時の働きに気づき

ます。先の聖書の言葉は、それに気づいた信仰の人の告白であります。

たしかに、私たちはさまざま計画を立て努力します。しかし、結果を見ると、成ることだけが成り、成らないこととは成らなかつたのです。人の努力と結果とはいつも同じではありません。思いかえして見ると、それぞれの「今」は、すべて成るべくして成った「今」なのです。

× 私たちが計画し努力して造りだす「わたしの時」がありません。しかし、一方に於いて、わたしの時を越えた「その時」即ち「神の時」があるのです。「わたしの時」と「神の時」とは対立するものではありません。「わたしの時」は「神の時」に抱きかかえられているのです。

× わたしの計画、わたしの業のすべては、神さまの眼差しの下にあります。わたしのすべてを見、知り、感じ、聞いておいでになる方のことを神さまと言います。その神さまが、善しとされる時が「神の時」であります。それは神さまの深い思いやりから生じ、愛が満ちている「時」です。しかし、私たちは「神の時」が秘めている有り難さを理解していません。

× このような「神の時」にたいして、「わたしの時」は、いつも利己心から生まれて来ます。「私はこうなりたい」「私はこのようになる」という「時」を実現させるために努力します。そして、そのような願いが実現した時には喜び、自分

を誇ります。しかし、実現する時が得られなければ人を恨み失望落胆します。「わたしの時」には、このような「喜一憂」が付きまとうのです。しかし「神の時」はそうではありません。この世もあの世も含めた、永い永い時の流れの中で、神の時が秘めている愛の現れとしての「今」が「今」として決定されるのです。ですから、その「今」が、人が造りだす「わたしの時」から見ても、どのように見えようとも、神の時である「今」は有り難き時なのであります。ですから、パウロは、「今は、恵みの時。今は、救いの日」と言ったのです。

× 信仰を持つということとは、この宇宙が、この地球が、この世界が、この私が「愛に満ちた神さまの時」の中で創造られ保持され完成させられて行くことの有り難さに目覚めることでもあります。

× 心を落ちつけ、目をこらし、耳を澄まし、思いを謙虚にして、自分の「今」を思いましよう。不平もありましよう。文句もあります。不満もあります。理屈で言いたいことが沢山あるでしょう。また、悔いもあり、嘆きもあります。不安もあります。しかし、神さまの時は深い愛の流れとして「今」私たちを抱きかかえていて下さり、万事のこと相い働きて益となして下さるのです。「わたしの時」に止まる限り不安はなくなりません。しかし、「神さまの時」に自分を委ねるなら、「神のなされることは皆その時になつて美しい」ことに気づかされるでしょう



## あしがき

聖書を読むということは、自分の生き方と死に方とを学ぶことであります。さまざま事が起こり、苦しんだり喜んだり、恨んだり誇ったり、信じたり疑ったり、褒めたり貶したりしながら生きるのが人生です。そんな自分であっても、自分の思いの深いところに安心を持つていれば、希望をもち、感謝して生き、死ぬことが出来ます。信仰をもつということはそのようなことだと思います。

この冊子は「みちしるべライト」六五号から七八号までを纏めたものですが、お読みくださる方の思いの深いところに、少しでも安心を芽生えさせていたたく奇縁になれば幸いです。

なお、これを一冊に纏める作業を惜しみなく労して下さった山本哲也氏に感謝いたします。

一九九五年四月一日

松下昌義

みちしるべ文庫 十一

「今から始めよう」

一九九九年六月二十日 第三刷発行

著者 松下昌義

発行所 左京キリスト教会出版部

京都市左京区下鴨南茶ノ木町二九  
電話（〇七五）七八一一九六四〇